

原 実著

古典インドの苦行

山下幸一

すべての宗教は何らかの精神鍛練の方法をもっている。そしてそれは、宗教的实践の主要部門となっている。

インドの宗教において、それは一般に「苦行」としてとらえられるものである。「苦行」がインドの宗教史を支える一大実践法であることに疑問の余地はない。しかし、「苦行」の源泉、歴史的発達の経緯、他の修行法、例えばヨーガとの関連など、問題は数多い。その中で「苦行」それ自体が孕む問題、すなわちひとは何故に苦行をするかという「苦行」の価値に関係する問題は最も重要である。

この問題を解く一方法として、著者原実博士は「苦行」を意味する tapas の語の文献学的研究を試みられた。すなわち、龍大な梵語諸典籍の中から、古典期の代表的文献であるマハーバーラタ (Mahābhārata)——古代ヒンドゥー教の百科全書の如き観を呈する約十万偈) を選び、その中に見える tapas の用例 (約三百回) に悉くあたるとしてマハーバーラタ中の tapas の語の全用例を踏まえたうえで、分類・整理する。従って、著者は、専ら tapas の共時的側面に関心を注ぎ、そこから tapas

の概念の諸様相を明らかにしようとするのである。

本書は著者が東京大学に提出した学位論文に基づく出版である。以下に著者の該博なる五百ページを超える労作を、その論述の次第にそって紹介することにしよう。

《総論》

本書が tapas の語の文献学的研究であること、マハーバーラタを資料とすることを述べる。

《序論》

tapas には「行」としての実践的(過程的)側面と、「神力」としての結果的側面の二面があることを実証し、以下の各章において、その二面を踏まえて tapas の概念内容を明らかにするといふ意図を述べるとともに、論述の順序・次第の概略を説明する。

《第一章 tapas の概念規定》

《第一節 tapas の定義とその問題点》 ここで、kṛtsna や Bhisma が旧来の「身体の枯渇や苛責」の苦行を斥け革新的定義を与えんとしているということを、用例でもって示し、旧来の tapas の実態を明らかにするために、第二・四節において三つの方法をとることを述べる。

《第二節 tapas の概念(1)〔名詞連合〕》 tapas の概念内容を明らかにするために、まず、tapas と連合する名詞、すなわ

ち、tapas と並び称せられる諸徳目一六〇有余を通覧する。これによって次の諸点が抽出される。tapas はヴェーダに伝統的な徳目および後世のヒンドゥー特有の徳目と列挙せられ、重要な倫理、宗教の概念の一つであった。また yoga の行と関連し、自制的・自戒的・禁欲的・バラモンの・武士階級的・呪法的・贖罪的な諸側面をもっている。以上は、内容的に精神生活における内向的節度・節制、従って精神力、超自然力の醸成に資するものと言える。

〈第三節 tapas の概念(2)〔形容詞連合〕〉 ここでは tapas の性格を決定する方途として、tapas を直接修飾する形容詞を検討する。その形容詞群は「質的」と「量的」とに大別できるが、それらには相互に出入りがあり、tapas の「過程」と「結果」との両側面と必ずしも符合しない。それらの側面は tapas の語に渾然一体となっている。

〈第四節 tapas の概念(3)〔動詞連合〕〉 ここでは tapas を Acousatins として取る十七種の動詞の用例を検討し、その結果、tapas に「行」乃至「苦行の過程」と「実体的神秘力」乃至「苦行の結果として行者の内に蓄積されるもの」との二側面のあることが確認される。

《第二章 tapas と力》

〈第一節 力(bala, vīrya, prabhava, śakti 連合)〉 ここでは、tapas が「力」(Daseinsmacht, power-substance)であること、文献の事例、すなわち bala, vīrya, prabhava, śakti

などの力を詮わす語と tapas が合成乃至連合している用例を蒐集・整理することによって立証する。

〈第二節 熱力(dip-, dyut-, dah-, sus- 連合)〉 ここでは、tapas が熱力であることを立証する。動詞「光輝」(dip-, dyut-)「焼却、燃焼」(dah-, jal-)と連合する場合、tapas はその外的顕現、外的現象形態として gāh- の形を取り、光輝、燃焼の具体的な母胎である「太陽」「火」が屢々比喩となって同一文脈に現われる。又、就中、「焼却」(dah-)と連合する場合、tapas を具えた行者の「怒り」、又時に「呪」の概念が随判している。

《第三章 tapas — 苦行(苦行の実態)》

〈第一節 節食の tapas)〉 この種の tapas は果物球根を食となす菜食主義に始まり、枯葉、水食の段階を経て風食、即ち断食を究極としている。ところが、枯葉を食となす段階には野菜・苔の類が数えられ、水食の段階には牛尿・牛乳・酥油・果汁が数えられ、泡・光線を食とする類も包摂せられている等、内容は必ずしも一様ではない。

〈第二節 作為的 tapas)〉 「苦行」の苦行たる所以は、困難な行法を長期間に亘って、同じ姿勢で不動のまま継続することと在る。この種の行法には、「一足にて立ち」「爪足にて立ち」などが言及されている。そして「節食の tapas」は「身体を呵す作為的 tapas」に先行し、前者の最終段階が後者に連接しているものと見る事ができる。またこの二種の tapas、苦行

の実態を通覧するに、その動機が極めて世俗的であることが知られる。

〈第三節 苦行者の衣と住、その他〉 行者は「襤褸をまとう」「獣皮」「樹皮」をまとうと称せられ、又彼らは「弁髪」を結っていた。tapas の場としては「森」が古来著名で「苦行森」(Tapo-vana) の合成語をうみ出した。tapas はもとそれ自体「力」であって、殊更「神」を介入せしめる必要はなく、宗教との結びつきは必ずしも必然性を有していない。しかしながら文献に懲するに、行者と神との互恵、give and take の概念を認めることができる。ここに、ヴェーダの祭祀に該当するヒンドゥー教の tapas の位置がある。両者は「社会的」「非社会的」の差はあっても、人間が神に接する契機となり世俗的な目的を成就する場となっていたのである。また tapas は四住期の中の「林棲期」に撰せられている。tapas が最後の遊行期の一步前に連関しているということは、tapas が離欲・解脱の類と一線を画していた証左となる。もともと、私利・私欲・執念・怨念によって動機づけられている tapas は、離欲・解脱という高邁な宗教的理念とは尚隔たりがあるのである。

《第四章 tapas——神秘力(1)(具格連合)——vara と śāpa——》

〈第一節 vara——神人の歩み寄り〉 「苦行」とその結果との間に一度び神が介入すると、そこに vara 授与のモチーフが導入されるようになる。文献のうえでは、tuṣ-, arāḍha-, prasād- の使役法の形が人間の側から tapas によって神を「満

足させ」「崇拜する」営み(人間→神格)を表現し、逆に、神は人間、行者の tapas によって「満足し」又「悦ぶ」(神格→人間)と表現される。そのように、人間は tapas によって神に奉仕し、神はそれに感応、満悦して vara を授与する。ここで tapas は手段、vara は目的の關係にあり、vara の授与者として唯一神が介入し、同時にその神の tapas による満足が、目的成就の前提となっていた。

〈第二節 条件付 vara〉 神は行者の tapas に満足しても、必ずしも常に行者の vara を全面的に承認するとは限らなかつた。ここに部分的・条件付 vara のモチーフがあらわれる。この種の条件付 vara は就中アストラの tapas 修行と、梵天の「不死性」拒否の間に見られ、アストラ必滅の物語の筋に伏線の役を果たしている。亦、条件付より進んで全面拒否のモチーフも散見し、ここに tapas の限界が看取されるときにも、この種の物語に登場する Indra と tapas との關係が問題になる。他面、その条件付 vara は、神が人間に化身する物語の展開に一役買うところがあった。

〈第三節 人間間の vara〉 ここで聖仙、行者である年齢的・精神的長上が、同じく年齢的・精神的に下位に在る者の tapas に満足して vara を与えるという、人間間の tapas にまつわる互恵の実態を明らかにする。聖仙等の長上者が下位者に vara を授与することは、彼等が己が内に tapas (神秘力) を具えている事を前提として初めて可能である。この tapas は「tapas の倉庫(nidhana)」 「tapas の依処(nivāsa)」に貯

貯蔵せられる。varaの授与者にして既に己が内に tapas(神秘力)を具えていなければならなかった事實は、他面この「tapasの倉庫」の概念と相俟って、新たに tapasまつわって登場した唯一神の性格を規定することになる。マハーバーラタにおいて神は、ヴェーダ文献にみえる如く「祭祀の享受者」のみならず「tapasの享受者」とされ、tapasも祭祀と同様、神々の「いのちの糧」となった。従って、神々が「tapasによって満足せられる」という「神人互恵」の構造は、人間間の互恵の拡大・投影と見做すことができるのである。

〔第四節 呪〕 聖仙・行者が怒って呪を發する、その有効性・不可謬性は彼らの内に保有した tapas(神秘力)の然らしむるところであるが、この場合、事態が切迫し、且つ行者が自制力を失うから、行者には己の tapasの収支の均衡を勘案する「精神的余裕」が欠如する。同類の「精神的余裕」なき tapasの放出は「愛欲耽溺」にも見られる。他方、「満悦」を契機に varaとして tapasを支出する際には「精神的余裕」がある。行者、人間のそのような tapasの消耗に比べて、神々は人間に varaを授けることはあっても呪うことはない。神々の tapasの宝庫は信心深い行者による tapasの納入によって増加し豊かになり、vara授与によって時に支出はあるにしても、大幅に減少することはない。この点が神と人間行者を区別する所以である。

《第五章 tapas——神秘力(2)(具格連合)》

〔第一節 知〕 tapasを積んだ苦行者は、その tapas(神秘力)によって「天眼、神秘的視力」を有つようになる。この種「神秘的視力」は唯単に行者の神通力として現われるのみならず、より高次の哲学的知見、大悟の類をも招来する。また、三界を見透す「天眼」は行者がその tapasの力によって他人に貸与する事ができた。「神秘的視力」は又、他人の心中洞察、正体看破、哲学的知見を可能にするとともに、過去・現在・未來に亘る知をも可能にする。また tapasによってヴェーダは知悉され、啓示され、修得される。

〔第二節 位〕 人が tapasによって到達しようとしたものに、「知」の他に特定の「位階」がある。古典インドに在って人間の最高の「位」はバラモン位であったから、彼らは tapasによってバラモン位を得、バラモンにならんと欲した。しかし、「バラモン位」はその到達が極めて困難で身分卑しき者は tapasによってもこれに到達することができない。この「位」は、激しい tapasにより、又幾多の輪廻転生を経てクシャトリアになったものが、その本務を遂行する事、忍辱の実践によって、次生乃至孫の代になって始めて到達される。しかし、この到達困難な「バラモン位」も、聖仙の真言によって立ちどころに成就したという例がある。次に tapasは天を成就するものと称せられる。tapasによって、神仙、バラモン、クシャトリア、更には身分卑しき者に至るまで生天した。また、「神位」神との「同等性」又「合一」も tapasによって到達せられる。しかし、神、

就中、Viṣṇu, Nārāyaṇa は tapas によつても相見ゆるを得ないといわれ、śrījīva は tapas 及び bhakti, anusmarana が優位に立つ。

《第三節 生滅》 ここでは次下の十一項目に亘つて主として動詞の性格に基づいて tapas の Instrumentalis と「生住滅」「生殺」の概念との連合を分類・整理する。(1)「創造」を意味する sṛj-。(2)一般的な「造作」を意味する kṛ-と、同じく「造作」「創出」を意味する nirma-。(3)宇宙論的な意味はなく、「忽然として現成せしめる」神秘的・呪術的意味合いをもつ utpādaya-。(4)より一般的な「誕生」を意味する jam-。これに關しては vara のモチーフが介在する。すなわち、tapas の神秘的力の面よりも苦行の意味合いが濃厚である。(5)「破壊」を意味する vinas-。(6)「殺戮」を意味する han-。(7)「併合」ras-や「焼却」を意味する dah-。(8)「生滅」の中間に位置する「住」の概念に關連して生き永らえるを意味する dhṛ-。(9)「生死」の中間に在つては生存・蘇生 jīva-。(10)「住」「生存」の他、成育・増大 vrda-。(11)「氣力」の充填・装填の意味合いをもつ動詞 apyay-。以上の分類・整理からも、tapas を具えた者はその tapas によつて、生住滅・生殺を自在に操ることが可能となるという、tapas の「力」の側面を理解することができる。

《第四節 浄》 tapas に帰せられる効力の一つに「浄罪」「罪障滅尽」がある。五大罪を始めとする「罪、穢れ」の概念は Ablativus に立ち、tapas は Instrumentalis に現われ、「解

放」の動詞(。muc-)の受動形と連合する。又、「罪、穢れ」を Accusativus に立ち、滅尽(han-)焼却(dah-)払い除け(muc-)除去(apavah-)の動詞の定動詞形を tapas の Instrumentalis と結びつけ、又それらの不定動詞形を所有合成語の一枝として tapas と結びつけている例も見られる。更には、tapas による「浄化」の概念も散見する。「浄化」の概念に伴つて、tapas の Instrumentalis 及びその類は「無垢、穢なき」の形容詞と連合する。但しこの浄化、浄罪はひとり tapas のみに帰せられていたのではなく、祭祀、布施を始めとする宗教的・倫理的諸徳目が tapas と共に同類の文脈に現われる。

《第五節 悉地》 抽象概念としての siddhi(悉地、神通力)とその類(siddha, sansiddha, siddh-)は tapas の Instrumentalis との連合の事情を見ると、概して悉地、神秘力、神通力の類は tapas によつて到達され、人は成就者、神通力を具えたものと成り得る。又、tapas によつて mahat, mahatva(大、偉大性)を見出す。「神秘的知」「浄罪」等に包摂されなかつた siddhi の具体的内容としての「神秘行」は、「他体闖入」「克死・延命・蘇生」「降神術」などに見ることができぬ。

《第六章 tapas の全能性と有限性》

《第一節 tapas の全能性》 じつは tapas の全能性を總括的に述べている章句を、「定型句」と「文脈」とに分類・整理する。定型句の蒐集から、この世に tapas より卓れたものなく、tapas によつて成就・到達せられ得ぬものとなへ、一切は tapas

に根差し、心に欲する一切の望みは *tapas* によって叶えられる、以上のことが明らかになる。次に、ある文脈をもつ章句の提示から、倫理・宗教的功德から無病息災・酒池肉林の類の現世の利益に至る一切は、*tapas* によって到達されると称せざれていることが明らかになる。

〈第二節 *tapas* の有限性〉 *tapas* の万能性が説かれる反面、*tapas* によっても到達不可能となす章句のあることは看過できない。それは「死」「運命」などの絶対的な「不可抗力」によるとされ、又、*tapas* 以外のものによれば可能とされる。後者の如き章句では、*bhakti, yoga, jhana* が *tapas* に替って強調される。ここに、*tapas* とともに古典インドの伝統的な倫理・宗教の徳目を排斥、蔑視しつつ、ヴィシヌ教、哲学的知見を高揚する新しい思想の抬頭を看取することができる。

〈第三節 *tapas* の世俗性〉 *tapas* は目的、果報のための手段である以上、利己的執念がつきまとう。この執念は *kāma* の語によって詮わされる。そしてその目指すところが果して宗教的徳目であったか否か疑わしめる面なしとはしない。*tapas* が林棲期の法であったことから、確かに「出世間的」概念であったと思われるが、真の離欲に達した遊行期の「出世俗的」な法であるとは言い難い。ここに *tapas* の限界がある。従って叙事詩の一般的文脈よりおさえ得る *tapas* は *Hinduism* の重要

な概念であり、インド宗教史を彩ってはいしたが、それは特殊な「民族宗教」にとどまって、普遍的な「世界宗教」の概念にはなりえなかった。

《第七章 結論》

こゝで前六章に亘って述べてきた *tapas* の諸側面を要約して、本書の結論としている。

以上、著者の論述の次第に沿って本書の内容を簡単に紹介した。各章各節には小結が与えられてあって、それぞれ或るまゝまりある論考の体装をとっている。それは、数多くの章句を挙げて文献的に実証している関係上必要なことであるが、反面記述が重複する結果にもなっている。なお、APPENDICES としつゝ、論述を補充するに「TRANSFER OF MERIT」「TAPODHANA」「INDRA AND TAPAS」の三英文論文と「INDEX LOCORUM (MAHĀBHARATA)」とが巻末に付加されている。こゝで苦言を呈するのが許されるならば、語句索引と Bibliography とが望まれる。最後に気付いた限りの誤植を示す。「焼却、焼焼」(p. 130, l. 26) → 「焼却、燃焼」(*vana-prartha-dharma*) (p. 187, l. 1) → (*vana-prastha-dharma*)。なお、多財釈 (p. 71 l. 25; p. 73 l. 27 p. 74, l. 9, 11) は有財釈に統一すべきか。

(昭和五十四年二月十日、春秋社、A 5 版、五一八頁、七五〇〇円)